

山に親しみ山に想う (1)

— なぜ山に登るのか —

<文・写真> =岡本=

「なぜ山に登るのか」という問いかけに対する「そこに山があるから」という答えは余りにも有名である。山歩きを始めるずっと以前から、何故か「そこに山があるから」は知っていたが、どういう経緯で知ったのか思いだせない。最近まで 山の本を読んだこともなく、周囲に山をやっている人もいなかったのに何故だろう。

最近、山の本を読み始めて、この質問と答えはどのような状況のもとに、誰が質問し、誰が答えたのかについて、気になりだした。「そこに山があるから」は、深奥な名言で山歩きの本質的なものや自然との関わり方などについて教えてくれるものではないかと思えてきたからである。「なぜマラソンを走るのか」、「なぜ100メートルを走るのか」の問いかけと答えについては知らないのに、山だけにあるのはどうしてだという子供じみた疑問もあった。



「そこに山があるから」は物の本によると、イギリスの登山家 ジョージ・マロリー(1886年—1924年)がエベレスト登頂に関連した質問に答えて「Because it 's there」と言ったものである。このことから、「山」とは当時未踏峰のエベレストのことであり、一般論としての「山」について述べたことでないことが分かる

ではマロリーはどんな場面で誰から質問を受けたのであろうか。「そして謎は残った 伝説の登山家マロリー発見記」によれば、「(要旨) ニューヨーク・タイムズ紙の記者から、なぜエベレストに登りたいのか、と何度も質問された揚げ句のことだった。マロリーは知識人だったし、ロマンチストでもあったから、こういった切り捨てるような言い方はしない。

別の機会に、ある記者がマロリーの言葉というのを発表しており、そちらのほうが、いかにもマロリーらしい。『クライミングに何か効用があるか、世界最高峰の登攀を試みることに何か効用があるか、と誰かに訊かれたら、私としては皆無と答えざるをえないだろう。科学目的に対する寄与など、まるでない。ただ単に、達成衝動を満足させたいだけであり、この先に何があるか目で確かめたいという、抑えきれない欲望が、人の心のなかには脈搏っている。地球の両極が征服された今、ヒマラヤのその強力な峰は、探検者に残された最大の征服目標である。』とある。要は、抑えきれない欲望の達成のため未踏峰のエベレストを征服したいと言っている。

1923年3月18日付のニューヨーク・タイムズ紙は、マロリーは「エベレストは世界最高の山であり。未だ誰も登頂していない。エベレストの存在は挑戦である。答えは、森羅万象を征服したいという人類願望の本能的なものである。」と述べたと報じている(ウイキペディアのジョージ・マロリー)。1923年の時期は、第2次エベレスト遠征(1922年)と第3次エベレスト遠征(1924年)の間で、マロリーはアメリカで講演活動などを行っていた。

地球の両極征服とは、1909年のアメリカによる北極点到達と次いで1911年のノルウェーによる南極点到達である。南極点到達一番乗りの競争では、イギリスのロバート・スコットがノルウェーのロアルド・アムンゼンに34日の差で敗北し、スコット隊は、復路で遭難している。植民地インドの裏庭にあたり、英国人ジョージ・エベレストの名前に因んで付けられたエベレストの初登頂は、当時大英帝国の国家的威信をかけた大挑戦であったといえる。



1924年の遠征隊員。後列左から、アーヴィン、マロリー、ノートン、オデル、マクドナルド。前列左から、シェビア、ジェフリー・ブルース、サマーヴェル、ビーサム

東ロンブーク氷河の第二キャンプ，1924年

「なんで山登るねん」で著者高田直樹は「第3回目のエベレスト遠征隊（注 1924年2月28日リバプール出港）の歡送会でのある貴婦人と隊員のマロリーとの間の会話だったようである。こんなはぐらかすようなことをいったのは、おそらく返答に窮したのでしょう。」とも書いている。しかし、著者は残念にもこの出所を明かしていない。

「そこに山があるから」の「山」は、一般論としての山ではなく、エベレストであるようだが、真実 マロリーの口から発せられたかどうかははっきりしないという見方もある。マロリーはイギリス国内、アメリカでマスコミやいろいろな人から何故エベレストに登るのかと問われたであろう。その時、真面目に答えたり、ユーモアを交えたり、ロマンチストらしく答えたり、いろいろあったであろうと推測できる。そのような状況のなかで、マロリーの人柄に合わない、切り捨てるような言い方の「そこに山があるから」は、記者か誰かが創作したとしてもあり得ないことではない。見方をかえれば、これ以上詮索することなく伝説的登山家の言葉らしく、未知を残し、真相についてはわからないままとしておくことも、許されるのではないだろうか。

<参考資料>

- ①「そして謎は残った 伝説の登山家マロリー発見 記」ヨッヘン・ヘムレブ、ラリー・A・ジョンソン、エリック・R・サイモンズ共著、文藝春秋 1999年12月刊
- ②「ウィキペディアのジョージ・マロリー」
- ③「なんで山登るねん わが自伝的登山論」高田直樹著、ヤマケイ文庫 2014年5月刊